

## 父親の関わりが児童期の社会性に及ぼす影響

### The influence of fathers' involvement on school-aged children's sociability

秋光恵子\* 村松好子\*\*  
AKIMITSU Keiko MURAMATSU Yoshiko

本研究は児童期の子どもに対する父親の関わりに焦点をあて、父親による量的な関与と質的な関与が子どもの社会性に及ぼす影響について検討を行った。子どもに対する父親の関わり、特に質的な関与については従来の研究ではほとんど取り上げられていないことから、本研究ではまず最初に、半構造化面接を通して子どもに対する父親関与を量的および質的な側面から整理した。その結果、子どもに対する父親の量的関与と質的関与は関わり方の内容の違いというよりも、関わり方の意図や目的の違いであることが示唆された。さらに父母母子を対象とした質問紙調査からは、父親の量的関与は「世話」「しつけ」「共行動」、質的関与は「積極的なコミュニケーション」「愛情表現」「自立への支援」と命名できるような3因子から、それぞれ構成されることが示された。また、そのような父親の関与は、それに対する子どもの認知と母親の養育態度を媒介して、子どもの社会性に間接的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。さらに、子どもが認知した父親関与と父子の接触時間との関係をみたところ、量的関与については接触時間が短い場合は父親の関わりが少なく子どもに認知されていることが示された。しかしながら、質的関与に関しては接触時間による差異は認められず、父親から質的にどの程度関わってもらっているかという子どもの認知は実際の関わりの長さとは無関係であった。これらの結果から、たとえ短い時間しか子どもと関わるができなくても、子どもと積極的にコミュニケーションをとり、愛情表現や自立に向けた支援を行うことで、父親は子どもの社会性の発達に対して大きな貢献をしようと考えられた。

キーワード：父親の子育て関与、量的関わり、質的関わり、児童期、社会性

Key words : fathers' involvement, quantitative involvement, qualitative involvement, school-aged children, sociability

#### 1. 問題と目的

子どもの対人関係は幼児期から児童期にかけて飛躍的に広がる。同年齢による仲間集団は、それまでの親子による縦の関係から、子ども同士の対等な横の関係へと変化することが大きな特徴である。その関係において子どもたちは、自己中心的な態度から脱却して他者の存在を認めることができるようになり、社会化され、友人からの肯定的な受容や相互作用によって精神的健康が保障されると考えられている(蘭, 1992)。ところが近年、学校生活の中で友人ができにくい子どもや、うまく関われない子どもが増えている。友人の輪の中に入れずに孤立する子どもも少なくない。文部科学省による調査では1997年の調査開始以来、小学校における暴力行為の発生件数も年々増加していることが示され、その原因として「忍耐力やコミュニケーション能力の足りない児童が気持ちを言葉で表現できず、暴力に走るケースが多いようだ」と分析されている(文部科学省, 2009)。また現代の子どもたちには、傷つくことを恐れて自分の居心地の良い状態を頑なに保とうとし、人間関係に変化を求めない傾向があることも指摘されている。これらの状況について蘭(1992)は、諸種の社会的スキルや親から独立するための十分な自立心が育つだろうかと、児童期の社会

性の発達に対する危惧を投げかけている。

子どもの多くが生まれたときから「家庭」という社会の中で育つことを考えると、社会性の発達に対して家族、とりわけ親の関わり方が様々な影響を及ぼしていることは明らかであろう。子どもの社会性の発達に対する親関わりの影響については従来から母子関係に注目した研究が蓄積されてきているが、これには、母親が子育ての中心的な担い手であるという実態とその背景にある性役割観、さらにはデータ収集上の問題等、様々な要因が関連しているという(柏木・若松, 1994; 佐々木・大日向・平塚・窪田・森・山口, 2000; 前田・内藤, 2003)。しかし、父親関わり的重要性は1960年代には既に指摘されており(Nash, 1965)、海外では1970年代から実証的な研究も行われてきた(Lamb, 1976等)。わが国においても1980年代になって父子関係や父親の育児関与に関する研究がみられるようになり、その動向をまとめた報告もなされている(佐々木, 1996; 佐々木ら, 2000; 森下, 2007)。そのなかで森下(2007)は、父親関わりの影響を母親のサポート役という第二養育者の枠組みから脱して再考する必要があると指摘している。父親関わりの子どもの直接的な影響を検討した研究では、例えば木田(1981)が幼児期における父親の育児参加は子ども

の社会面を含む様々な側面の発達に有意な影響を及ぼしていることを示し、中野（1992）も遊びを中心とした父子関係は子どもの発達と相互関連が深いと結論づけている。加藤・石井・牧野・土谷（2002）は、1990年代前半と後半における3歳児の社会性に対する父親の育児関わりの影響を比較したが、どちらの時期においても育児関わりが多い父親を持つ子どもの社会性は、そうではない父親の子どもより発達しているという結果を得ている。しかしながら、これまでの研究の多くは幼児期における父親関わりの影響を取り上げており、児童期の子どもへの関わりに焦点をあてた研究はほとんどなされていない。子どもの社会性が乳幼児期に経験される親との関係性を基盤として発達するにしても、子ども自身が自らの社会性を自覚しはじめ、意識的に人間関係の構築に取り組みを始めることでそれまでよりも困難な状況に遭遇し、それを克服することで成長していく過程においては、過去に蓄積された関係性だけでなく、親とのリアルタイムな関係性も様々な影響を及ぼしているはずである。ところが、児童期の子どもと父親との関係については、実態調査的な研究（木田・大谷, 1992a; 児玉・水原, 1992）や、子どもとの接触頻度（木田・大谷, 1992b; 石井, 2004）や食事時の会話（平井・岡本, 2003）といった極めて限定的な変数によって父親関わりを測定した研究が散見されるに留まっているのが現状である。そこで本研究では、児童期の子どもに対する父親の関わりに焦点をあてて、その内容を広く検討し、父親関わりが子どもの社会性に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。また本研究では、児童期の中でも特に社会性の発達の程度に差異が広がり始める小学校中学年の子どもとその父親との関わりに注目するものとする。

父親の育児関与に関する研究においては、子どもへの関わりを接触頻度や時間的な長さといった量的な側面で測定するのは一般的な傾向である。父親の育児関与において量的な側面を重視する理由として木田（1981）は、①今日の父親と母親の育児関与には量的に大きな開きがある、②親子間の安定した一定の接触を確保するためには量的な育児関与が必要である、③子どもと接触時間の短い父親にとっては、育児関与の量的増大が質の向上をもたらす、という3点を挙げている。質的に関わるためには関わる量を増やさなければならないという木田（1981）の指摘はもっともであり、父親の関わる時間や頻度が子どもの発達に影響を与えることは先行研究からも明らかである（木田, 1981; 中野, 1992; 加藤・石井・牧野・土谷, 2002; 石井, 2004）。しかし父親の育児関与を量的な側面だけで捉えることに異議を唱えた研究もあり、海外では大規模な文献調査やインタビュー調査の結果を踏まえて、「世話」「しつけ」「宿題の手伝い」といった量的な関わり以外にも、「情緒的なサポート」「子ども

の生活に関心をもつこと」「子どもの才能や将来への支援」「経済的保障」など、頻度や時間では測れないような質的な関わりも含む幅広い内容から構成された育児関与尺度も作成されている（Hawkins, Bradford, Palkovitz, Christiansen, Day & Call, 2002; Palkovitz, 2002）。子どもの成長に伴って、乳幼児期には重要であった食事や着替えの世話等の必要性が児童期では低減する代わりに、友人とのつきあい方のような悩みに対する援助が必要になるといった具合に、親の関わり方も変化すると考えるのが自然であろう。そして関わり方の変化は、直接的な援助（例えば、つきあい方を教える）だけではなく、子ども自身が自らの力で解決方法を見つけることができるような間接的な援助（例えば、話を聞くなどの情緒的援助）の重要性が高まる、といった側面においても生じるであろう。つまり児童期の父親関わりについては、質的な側面からも捉えることが不可欠であると考えられる。わが国においても量的ではない父親関わりの変数を取り入れた研究はあるが、幼児をもつ父親を対象にして“子どもの興味関心を広げる”といった「知的刺激行動」（中野, 1992; 加藤, 1992）や“自分の仕事について子どもに話す”“子どもの勉強や相談にのる”といった「子どもとのコミュニケーション」（木田・大谷, 1992a; 尾形・宮下, 1999, 2000; 尾形, 2001）等の数項目を用いているのみである。したがって、児童期の子どもに対する父親の質的な関わりについては新たに内容を検討したうえで、その影響を明らかにする必要がある。また、父親の子どもに対する質的な関わり的重要性を実証することは、子どもと関わる時間を増やすことが社会経済的な状況から容易ではないという現実のなかで、たとえ短い時間であっても子どもに関わる動機づけを促進することにも寄与するであろう。この点からも、父親の質的な関わりが子どもにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることには意義があると考えられる。

以上のことから、本研究では特に児童期の子どもに焦点をあてて、調査1において父親の量的な関わりと質的な関わりの内容を明らかにし、調査2においてそれらの関わりが子どもの社会性にいかなる影響を及ぼしているのかを検討するものとする。

## 2. 調査1

### (1) 目的

小学校中学年の子どもを持つ父親の質的な関わりと量的な関わりの内容を、半構造化面接によって明らかにする。

### (2) 方法

**調査対象** A県内の公立小学校に通う小学3, 4年生の子どもをもつ家族8組に調査協力を依頼し、6組の家族から協力への同意を得た。なお、調査協力の依頼に

あたっては、家族構成やきょうだい関係に偏りが無いよう配慮した。

**調査方法** 2006年2月に父親、母親、子どもに個別の半構造化面接を実施した。面接は家族の希望に沿って、調査協力家族の自宅もしくはB大学図書館内研究室で実施した。

**調査内容** 面接では、父親と母親の子どもに対する日常生活での関わりについて尋ねた。父親への質問項目は、①子どもとの会話や行動の内容、②子どもが小学生になったことによる関わりの変化、③子どもと接するとき心がけていること、④父親の出番だと思えるのはどんな時か、⑤父親にしかできない関わりについて、であった。母親に対しては上記の①から④に加えて、⑤父親の協力があると子どもへの関わり方が変わるか、も尋ねた。また子どもには、①父親や母親との会話や行動の内容、②父親や母親からしてもらって嬉しかったこと・楽しかったこと・嫌だったこと、③父親や母親に手伝ってほしいこと・聞いてほしいこと、を尋ねた。面接時間は一家族につき30分程度であった。なお面接内容は、家族全員の同意を得て録音した。

### (3) 結果と考察

**子どもに対する父親関わりの特徴** インタビューの内容について逐語録を作成し、父親・母親・子どものそれぞれが表現した「子どもへの関わり方」を項目化した。その結果、「父親による関わり」については父親自身の語りから142項目、母親の語りから49項目、子どもの語りから59項目が得られた。さらに各項目内容の類似性や共通性を検討したところ42項目に整理され、『子どもの世話（朝起こす、勉強を教える等）』『しつけ（挨拶を教える、わがママを叱る等）』『会話を通した交流（学校での出来事のことを話す、スポーツの話をする等）』『遊び・レジャーを通した交流（外で遊ぶ、家族で出かける等）』『スキンシップを通した交流（一緒に風呂へ入る、一緒にテレビを観る等）』『子どもへの関心（授業参観に行く、子どもの悩みを知る等）』『成長への支援（子どもの個性を伸ばす、子どもの性格にあわせて褒める等）』『社会との接点をつくる（子どもと仕事の話をする、地域の行事や祭りに参加させる等）』『父親の存在感・役割（父親はいるだけで安心、最後に叱る役割等）』という9カテゴリーに分類された。また、母親と子どもへのインタビューから得られた「母親による子どもへの関わり方」についても父親と同様の手続きで内容を整理した結果、「父親の関わり方」と同じカテゴリー（『父親の存在感・役割』を除く）に分類された。

父親の関わりと母親の関わりが同じカテゴリーで整理されたという結果は、子どもに対する具体的な関わりの内容において父親と母親に大きな相違はないことを示唆していると言えよう。しかしながら、子どもに対する父

親の関わり方を語る言葉には、“日常生活に関することは母親に任せるが、子どもと社会とのパイプ役となり、社会生活の規範を示す存在となることが父親の役割と考えている”“母親は子どもの生活の中心である学校の人間関係に心配りをしており、父親は将来子ども達が出て行く社会の厳しさを念頭に置いた人間関係の築き方を教えようとしている”といった表現が共通して確認された。そして、“父親の存在感を示すだけでなく、母親とのバランスが必要”ということが強調されていたことも、共通点であった。例えば、“子どもの相談相手は主に母親であるが、母親が聞けなかった周辺状況を、父親が別の機会に聞くようにしている”と語った家族があった。また、父親が“わが子をよその子よりも精神面で強く育てたい”と語った家族では、母親が“他者との関係を大切にしよう育てている”と語っていた。また、複数の母親が“父親は日常生活の中では子どもと関わる時間は少ないが、母親を補う存在である”と述べていた。これらの語りからは、父親と母親がまったく同じ関わり方や接し方をするのではなく、役割上もバランスをとりながら子育てに関わっている様子が窺えるであろう。このように父親と母親が子どもへの関わり方を工夫する中で父親に任された役割が、『父親としての存在感・役割』というカテゴリーとしてあらわれたと考えられる。

**父親の量的関わりと質的関わり** 次に、子どもに対する父親の量的関わりと質的関わりについて考える。木田（1981）をはじめ、先行研究では父親の関わりを時間や頻度で尋ねるものが多く、それらも父親の関わり的重要な側面であることは先に述べた。しかしながら調査1の結果では、父親や母親は子どもの内面への関わりに強い関心と注意を払っていることが示された。例えば、『会話を通した交流』という関わりでは、できるだけ長くあるいは頻繁に会話をしようとするだけでなく、会話を通して一日の出来事や様子、友だちとの関係を把握しようとしていることが意識されていた。このことは、「量的な関わり」と「質的な関わり」は必ずしも関わりの内容が異なるのではないということを示唆していよう。つまり、従来の研究においてしばしば使用されている“一緒に遊ぶ”という尺度項目でも、時間の長さや頻度で回答を求めているがために「量的な関わり」となっているものであり、“一緒に遊ぶ”ことが子どもの理解や精神的な触れ合いの手段となっているのであれば「質的な関わり」とみなされると考えられる。このような観点から9カテゴリーに整理された父親の関わり項目が、質的関わりと量的関わりどちらとみなされるかについて、さらに分類を試みた。その結果、『子どもの世話』に属すると考えられた項目（“勉強などを教える”“食事の用意をする”等）は主に量的な関わりとみなされ、逆に『成長への支援』（“子どもが興味をもったことに協力す

る”等)と『父親の存在感・役割』(“父親は最後に叱る役割”等)は主に質的な関わりとみなされると考えられたが、それら以外のカテゴリーはいずれも質的な関わりと量的な関わりの方から構成されていると解釈された。そこで本研究では、量的な関わりを「時間や回数等の頻度でカウントできる関わり」、質的な関わりを「子どもの理解や精神的な触れ合いを求めるものであり、頻度ではカウントできない関わり」と考えるものとして、調査1で得られた9カテゴリー42項目をベースとして尺度項目を作成し、量的ならびに質的な父親の関わりが子どもの社会性にどのような影響を及ぼしているのかについて調査2で検討するものとした。

### 3. 調査2

#### (1) 目的

子どもに対する父親の量的および質的な関わりが、子どもの社会性に対していかなる影響を及ぼしているのかについて、質問紙調査により検討する。なお子どもの社会性の発達に関する従来の研究では、母親の養育態度が強い影響を及ぼしていることや(戸ヶ崎・坂野, 1997)、父親の関わりは母親の育児行動を媒介して子どもに間接的に影響を及ぼしていることが明らかにされている(数井・無藤・園田, 1996; 尾形・宮下, 2003)。また父親関わりの子どものに対する効果は、父親関わりに対する子ども自身の認知が影響していることも示されている(石井, 2004)。そこで本調査では、父親関わりに対する母親と子どもの認知、および母親の養育態度も測定して、父親関わりが子どもの社会性に対して与えている直接効果と間接効果を明らかにするものとする。

#### (2) 方法

**調査対象および手続き** A県内の公立小学校に在籍する小学4年児童とその保護者に調査を実施した。子どもへの調査は学級ごとに集団で実施し、父親と母親への質問紙の配布と回収は子どもを通して行った。回答はすべて無記名とし、回答後は各自が個別に封筒に入れて封をした状態で回収した。ただし子ども、父親、母親の回答を対応させるために、質問紙にはあらかじめ識別番号をつけて配布した。なお母子・父子家庭の子どもおよび保護者には、あらかじめ質問の内容や表現を変更した質問紙を配布した。調査時期は2006年5月下旬から7月上旬であった。

349名の子どもに質問紙を配布した結果、全員から回答を得た。また父親では321名のうち289名から(回収率90.0%)、母親では345名のうち311名から回答を得た(回収率90.1%)。これらのデータから回答に著しい不備のあるものを除いた有効回答数は、子ども263(有効回答率75.4%、男児124名、女児139名)、父親279(有効回答率96.5%)、母親274(有効回答率88.1%)であり、父

母子が揃っているデータは258組であった。

**子どもに対する父親関わり測定** 調査1から得られた42項目を、量的もしくは質的な関わり測定項目として適切になるよう文言を修正して用いた(Table 1, Table 2)。量的関わり項目は14項目であり、質的関わり項目は28項目である。各項目について父親には、子どもに対して日常的にどの程度しているかを「あまりない(1点)」から「かなりある(4点)」の4段階で回答を求めた。母親および子どもに対しては、各項目の内容を母親(子ども)からみて父親が日常的にどの程度しているかを尋ねるように文言を修正して用い、それぞれ4段階で回答を求めた。

**子どもの社会性の測定** 子どもの社会性のレベルは戸ヶ崎・坂野(1997)が作成した学校における社会的スキル尺度により測定した。この尺度は「困っている友だちを助ける」「相手の気持ちを考えて話す」等の22項目から成るものであり、「全然そうでない(1点)」から「いつもそうだ(4点)」までの4段階で子どもに回答を求めた。なお因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果、戸ヶ崎・坂野(1997)と同様の「関係維持行動」( $\alpha=.812$ )、「関係向上行動」( $\alpha=.755$ )、「関係参加行動」( $\alpha=.675$ )と命名される3因子が抽出された。

**母親の養育態度の測定** 母親の養育態度の測定には、尾形・宮下(2003)が作成した尺度を用いた。この尺度は「子どもと色々話をすることが多い」「子どもを叱ることが多い」等の17項目から成るものであり、各項目に対しては「あまりない(1点)」から「かなりある(4点)」までの4段階で母親に回答を求めた。なお因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果、尾形・宮下(2003)と同様の「拒否的態度」( $\alpha=.855$ )、「親和的態度」( $\alpha=.772$ )、「威圧的態度」( $\alpha=.773$ )と命名される3因子が抽出された。

**回答者の属性** 父親と母親に対しては年齢、職業、休日の形態、平日および休日に子どもと一緒に過ごす時間(食事や風呂等の時間も含む)、子どもの人数、同居家族について、また子どもに対しては性別ときょうだいについて回答を求めた。

父親と母親の主な属性は以下の通りであった。まず父親(N=279)の年齢は、20代2名(7.0%)、30代106名(38.0%)、40代143名(51.3%)、50代23名(8.2%)、不明5名(1.8%)であった。職業は、会社員204名(73.1%)、自営業27名(11.5%)、公務員16名(5.7%)、専門職13名(4.7%)、農林水産業5名(4.7%)、その他12名(4.3%)、不明2名(0.7%)であった。また休日は、土日祝102名(36.6%)、土日48名(17.2%)、土または日56名(20.1%)、その他71名(25.4%)、不明2名(0.7%)であった。平日および休日に子どもと一緒に過ごす時間は、平日の平均値が2.18時間(SD=1.86、最小値=0分、

最大値=12時間、最頻値=1時間)であり、休日の平均値が7.64時間 (SD=5.12, 最小値=30分, 最大値=24時間, 最頻値=8時間)であった。母親 (N=282) の年齢は20代4名 (1.4%), 30代159名 (56.4%), 40代113名 (40.1%), 50代2名 (0.7%), 不明4名 (1.4%)であった。また有職者が172名 (61.0%), 無職者が108名 (38.3%), 不明2名 (0.7%)であった。

### (3) 結果と考察

分析に先立って父親関わり項目の得点分布を父母子ごとに確認した結果、すべての項目において著しい偏りはみられなかった。次に子どもの性別によって父親関わり項目の評定値に差異があるかどうかを確認したところ、有意差が認められたのは42項目中、父親評定で2項目、母親評定で1項目、子ども評定で5項目のみであった。したがって、父母子のいずれの認知においても父親の関わり方には子どもの性別による差異は大きくないと考えられた。そこで以下の分析では、子どもの性別を込みにして検討を進めるものとした。なお分析にはSPSSver.14およびAmos5を用いた。

**父親の量的関わり項目の因子分析** 父親の量的関わりの測定項目として用意した14項目に対して、父母子ごとに因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から検討した結果、父親認知では3因子解が適切と考えられたが、母親認知と子ども認知においては意味のある因子の抽出が困難であった。そこで母親認知と子ども認知については主成分分析を行ったところ、すべての項目が第1主成分に.5以上の負荷量を示したことから、父親の量的関わりに対する母子の認知は1因子構造であると解釈した。なお項目の内的一貫性を示す $\alpha$ 係数は、母親認知で $\alpha=.865$ 、子ども認知で $\alpha=.871$ と、十分な高さを示した。

父親認知における因子パターンはTable 1に示した通りである。第1因子は“1人でできないことを手伝う”“風呂やテレビなど一緒に過ごす”“勉強などを教える”等の7項目から構成され、「世話」因子( $\alpha=.737$ )であると解釈した。また第2因子は“いけない言動を注意する”“事故や事件について注意する”“きまりや約束を守らせる”の3項目であり、「しつけ」因子( $\alpha=.705$ )と解釈した。さらに第3因子は“学校行事や試合を見に行く”“一緒に遊ぶ”“家族で過ごす時間をもつ”“子どもの友だちと一緒に活動する”の4項目であったことから、「共行動」因子( $\alpha=.672$ )と解釈した。これらの因子のうち第1因子と第2因子は、調査1における『世話』および『しつけ』のカテゴリーに属する項目が中心となって構成されていたが、第3因子は面接調査の結果を整理した段階では『会話』『遊び・レジャー』『スキンシップ』と細分化していたカテゴリーの項目がひとまとまりになって「共行動」として抽出されたものであった。

なお各因子の因子間相関はすべて $r=.4$ 以上であった。

**父親の質的関わり項目の因子分析** 父親の質的関わりの28項目に対しても、量的関わり項目と同様に因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果、父親認知と母親認知では3因子解を、子ども認知においては1因子解( $\alpha=.963$ )を採択した。

父親認知と母親認知における3因子解はほぼ同じ項目から構成されており、父親認知における因子パターンはTable 2に示した通りであった。第1因子は“子どもが関心をもっていることを話す”“子どもの困っていることを知っている”“友だちとのつきあい方などを一緒に考える”といった子どもとの会話を通して子どもを理解し支えるような内容の項目から構成されていたことから「積極的なコミュニケーション」因子(父親: $\alpha=.885$ , 母親: $\alpha=.901$ )であると解釈した。また第2因子は“社会のルールを教えている”“道徳上大切だと思うことを教えている”“子どもが将来社会で一人歩きできるように育てている”等の項目であり、「自立への支援」因子(父親: $\alpha=.782$ , 母親: $\alpha=.857$ )と解釈した。さらに第3因子は“子どもに対する愛情を言葉や行動で表わしている”“子どもと過ごすことは大切だと考えている”“子どもに精神的な安心感を与えている”等であったことから、「愛情表現」因子(父親: $\alpha=.781$ , 母親: $\alpha=.861$ )と解釈した。これらの因子と調査1で整理されたカテゴリーとの対応をみると、第2因子は『しつけ』および『父親の存在感・役割』のカテゴリーに分類されていた項目と『社会との接点』のカテゴリーに属する一部の項目によって構成されていた。それら以外のカテゴリーに含まれる項目は、子どもに対する知識・理解や関心の強さにかかわる項目は第1因子として、また子どもを誉めるなどの愛情表現にかかわる項目は第3因子として再構成されていることが確認された。なお各因子の因子間相関はすべて $r=.5$ 以上であった。

**父親関わりに対する父母子間での認知の差異** 子どもに対する父親の関わりが父母子においてどのように認知されているのか、その差異を検討するために、家族ごとにマッチングした三者間で評定値を比較した(Table 1, Table 2)。その結果、最も高い評価を与えているのが父親である項目は11項目、母親は21項目、子どもは10項目となり、父母子のなかでは母親が、父親の子どもに対する関わり方の全般について高く評価していることが示唆された。父母子間で有意差が認められた項目は42項目中31項目であり、そのなかでも母親は量的関わりの「世話」と質的関わりの「積極的なコミュニケーション」について、父親の関わりを父子よりも高く評価していた。一方、父親自身は質的関わりの「自立への支援」において自己評価が高かった。子どもからの父親関わりの評価は、全体として父親と母親が考えているよりも低かった

Table 1 父親の量的な関わり項目に対する父親認知の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転)および父親・母親・子どもによる認知の得点比較

	因子分析結果			父親認知			母親認知			子ども認知			分散分析結果		
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	(df=2/498~514)
第1因子 世話(α=.737)															
生活の中で1人でできないことを手伝う	.738	-.006	-.174	.401	2.322	(0.864)	2.337	(0.945)	2.788	(1.099)	22.181	***	子>父>母		
風呂に入ったりテレビを見たりするなど、子どもと一緒に過ごす	.653	-.152	.225	.572	2.795	(0.892)	2.949	(0.933)	2.626	(1.185)	8.959	***	母>父>子		
子どもと話す時間をもつ(一日の出来事・冗談・テレビの話など)	.603	.108	.140	.581	2.802	(0.877)	2.957	(0.973)	2.918	(1.144)	2.036				
勉強や分からないこと、調べ方などを教える	.416	-.066	-.036	.134	2.070	(0.843)	2.519	(1.010)	2.903	(1.078)	7.101	***	子>母>父		
子どもによく声をかける(「おはよう」「おやすみ」など)	.366	.192	.108	.319	3.331	(0.864)	3.416	(0.872)	3.043	(1.180)	15.964	***	母>父>子		
日々の生活の中で、子どものために食事の用意などをとする	.358	.103	-.024	.162	1.929	(0.971)	2.492	(1.251)	2.238	(1.096)	21.813	***	母>子>父		
子どもに親(自分)の仕事の話をする	.353	.317	-.162	.241	1.953	(0.895)	2.278	(1.067)	2.129	(1.099)	8.461	***	母>子>父		
第2因子 しつけ(α=.705)															
言っていないことや、してはいけない事などの言動について注意する	-.100	.758	-.006	.510	3.349	(0.721)	3.267	(0.883)	3.145	(1.079)	3.918	*	父>子		
子どもが巻き込まれる事故や事件に関心をもち、子どもにも注意する	.186	.618	-.019	.513	3.262	(0.776)	3.227	(0.833)	3.352	(0.967)	1.943				
家での決まりや約束を守らせる	-.108	.605	.144	.385	2.878	(0.793)	2.776	(0.912)	2.701	(1.120)	2.872				
第3因子 共行動(α=.672)															
学校行事に参加したり、習い事の発表会や試合を見に行ったりする	-.255	.066	.717	.363	2.601	(1.073)	2.888	(1.094)	2.671	(1.218)	7.373	***	母>子>父		
子どもと外で一緒に遊ぶ	.188	-.105	.613	.504	2.535	(0.934)	2.496	(1.070)	2.678	(1.197)	3.064	*	子>父>母		
家族で出かけするなど、家族で過ごす時間を持つ	.054	.139	.518	.394	2.918	(0.852)	3.023	(0.966)	2.961	(1.091)	1.048				
子どもと友だちや近所の子どもと一緒に遊んだり、活動したりする	.204	-.035	.371	.264	1.803	(0.907)	1.965	(1.053)	1.917	(1.069)	2.214				

※ 網掛けは、三者の中で有意に高い得点であることを意味している。 \*\*: $p<.01$ , \*\*: $p<.05$ , +: $p<.1$

Table 2 父親の質的な関わり項目に対する父親認知の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転)および父親・母親・子どもによる認知の得点比較

	因子分析結果			父親認知			母親認知			子ども認知			分散分析結果		
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	(df=2/498~514)
第1因子 積極的なコミュニケーション(α=.885)															
子どもが関心を持っている話題について話をする	.787	-.242	.031	.501	2.669	(0.820)	2.843	(0.897)	2.697	(1.063)	3.427	*	母>子>父		
子どもが困っていることや悩みを知っている	.704	-.058	-.047	.414	1.953	(0.828)	2.244	(0.987)	2.035	(1.019)	7.805	***	母>子>父		
友だちとの付き合い方や友だちに関する悩みの解決の方法を子どもと一緒に考える	.620	.048	.011	.468	2.129	(0.883)	2.449	(0.988)	2.035	(1.107)	15.733	***	母>父>子		
子どもがやり始めたことを続けられるように励ます	.628	.057	-.034	.405	2.878	(0.872)	2.867	(0.912)	2.710	(1.151)	3.443	*	母>父>子		
自分の経験を話すなど、子どもと将来の夢や希望について話をする	.616	.305	-.193	.477	2.502	(0.961)	2.689	(1.006)	2.323	(1.228)	9.955	***	母>父>子		
子どもが話しやすい雰囲気を作ったり、家話との会話の時間をもつ	.603	.075	-.081	.349	2.444	(0.833)	2.401	(0.980)	2.603	(1.089)	3.809	*	父>母>子		
子どもが個性を伸ばすために、親がよいと考えたことをさせたり環境を整えたりする	.583	-.119	.252	.517	2.447	(0.842)	2.771	(0.981)	3.233	(1.030)	52.216	***	母>子>父		
子どもが興味・関心のあることや好きなもの(こと)を知っている	.578	.029	.002	.355	2.805	(0.783)	3.036	(0.909)	2.940	(1.058)	4.854	***	母>子>父		
子どもと友だちについて知っていることがある(名前・ニックネーム・特徴など)	.540	-.064	-.030	.238	2.253	(0.903)	2.693	(1.028)	2.374	(1.156)	15.524	***	母>子>父		
子どもが関心を持っているスポーツや遊びの相手をする	.536	.059	.038	.357	2.760	(0.975)	2.850	(0.991)	2.909	(1.171)	1.991				
子どもが興味・関心を持ったことに協力する	.521	-.022	.261	.512	2.654	(0.865)	2.835	(0.909)	2.598	(1.171)	4.888	**	母>父>子		
地域の行事や祭りに参加させるなど、人や地域との関わりの中で子どもを育てている	.437	.119	.181	.429	2.972	(0.777)	3.008	(0.839)	2.846	(1.061)	2.718				
第2因子 自立への支援(α=.782)															
子どもに社会のルールを教える役割だと考えている	.814	-.066	.632	.632	3.188	(0.754)	2.977	(0.858)	2.191	(1.127)	95.946	***	父>母>子		
挨拶などの礼儀や金銭感覚など、道徳上大切なことを教える	.725	-.045	.529	.529	3.315	(0.754)	3.101	(0.904)	2.572	(1.137)	51.756	***	父>母>子		
子ども自身が将来社会で一人歩きできるように育てている	.659	.137	.399	.399	3.628	(0.599)	3.074	(0.907)	2.853	(1.099)	57.625	***	父>母>子		
自分の信念を持って子育てをしている	.558	-.006	.381	.381	2.914	(0.863)	2.828	(0.951)	2.988	(1.038)	2.262				
子どもが困難なことに遭遇したときには子どもを守ろうと考えている	.373	.284	.291	.291	3.460	(0.738)	3.234	(0.850)	2.694	(1.103)	56.074	***	父>母>子		
母親とは違う見方や考え方で子どもをわかってやれると考えている	.201	.181	.156	.156	2.688	(0.816)	2.656	(0.910)	2.544	(1.105)	1.858				
第3因子 愛情表現(α=.781)															
子どもに対して愛情を言葉や行動で表わしている	.764	-.036	.534	.534	2.957	(0.866)	3.004	(0.998)	3.424	(0.879)	24.930	***	子>父>母		
子どもと過ごすことは大切だと考えている	.646	.068	.421	.421	3.469	(0.684)	3.384	(0.871)	2.934	(1.055)	29.649	***	子>母>父		
子どもに精神的な安心を与えている	.534	.086	.302	.302	2.809	(0.888)	2.844	(0.897)	3.113	(1.034)	8.852	***	母>父>子		
子どもがよい成績をとったり頑張っていることがうまできた時にほめる	.418	.177	.418	.404	2.612	(0.881)	2.448	(0.981)	2.680	(1.106)	4.345	*	子>父>母		
子ども自身の性格や行動を把握している	.276	-.129	.282	.324	3.213	(0.766)	3.358	(0.806)	3.264	(0.964)	2.315				
子ども自身に考える機会を与える	.273	.172	.278	.393	2.961	(0.756)	3.039	(0.876)	2.488	(1.025)	31.751	***	母>父>子		
子どもが失敗したときや落ち込んだときになくさめる	.248	.248	.249	.144	2.859	(0.804)	2.816	(0.855)	2.547	(1.051)	10.368	***	父>母>子		
父親は最後に叱ったり意見を言う役割だと考えている	.095	.248	.249	.144	2.769	(1.010)	2.922	(0.957)	2.416	(1.177)	17.131	***	母>父>子		

※ 網掛けは、三者の中で有意に高い得点であることを意味している。 \*\*: $p<.01$ , \*\*: $p<.05$ , +: $p<.1$

Table 3 父親の量的・質的関わりに対する父親認知および子ども認知の接触時間による比較

	量的関わり(父親認知)				質的関わり(父親認知)				量的関わり(子ども認知)		質的関わり(子ども認知)	
	世話	しつけ	共行動	コミュニケーション	自立への支援	愛情表現	平均値	SD	平均値	SD		
平日の接触時間												
1 1時間未満	2.137 (0.469)	2.853 (0.700)	2.385 (0.637)	2.226 (0.513)	3.036 (0.557)	2.840 (0.589)	2.467 (0.627)	2.404 (0.647)				
2 1時間～2時間	2.419 (0.474)	3.167 (0.538)	2.348 (0.653)	2.481 (0.458)	3.279 (0.552)	3.011 (0.531)	2.741 (0.692)	2.746 (0.740)				
3 2時間～3時間	2.523 (0.541)	3.246 (0.609)	2.540 (0.672)	2.740 (0.560)	3.411 (0.571)	3.097 (0.593)	2.904 (0.657)	2.852 (0.662)				
4 3時間～4時間	2.517 (0.595)	3.306 (0.541)	2.651 (0.672)	2.589 (0.596)	3.396 (0.518)	3.053 (0.527)	2.739 (0.771)	2.744 (0.813)				
5 4時間以上	2.857 (0.467)	3.254 (0.536)	2.598 (0.666)	2.778 (0.596)	3.439 (0.408)	3.089 (0.480)	2.801 (0.634)	2.734 (0.724)				
分散分析結果 (df=4/209~270)	12.267*** 1<2,3,4<5	4.762*** 1<2,3,4,5	2.279	8.524*** 1,2<3,4,5	4.620*** 1,2<3,4,5	1.825	2.538* 1<3	2.220				
休日の接触時間												
1 4時間未満	2.271 (0.500)	2.883 (0.555)	2.129 (0.617)	2.371 (0.507)	3.147 (0.517)	2.839 (0.548)	2.431 (0.744)	2.501 (0.758)				
2 4時間～7時間	2.476 (0.578)	3.226 (0.555)	2.422 (0.574)	2.503 (0.544)	3.274 (0.541)	3.004 (0.582)	2.806 (0.669)	2.851 (0.719)				
3 7時間～10時間	2.455 (0.479)	3.227 (0.569)	2.640 (0.647)	2.607 (0.517)	3.327 (0.527)	2.970 (0.459)	2.705 (0.657)	2.579 (0.683)				
4 10時間～13時間	2.483 (0.504)	3.090 (0.591)	2.561 (0.625)	2.537 (0.474)	3.368 (0.557)	3.131 (0.502)	2.759 (0.633)	2.695 (0.746)				
5 13時間以上	2.812 (0.542)	3.429 (0.651)	2.923 (0.643)	2.909 (0.636)	3.557 (0.489)	3.285 (0.517)	3.019 (0.547)	2.877 (0.654)				
分散分析結果 (df=4/209~270)	6.415*** 1,2,3,4<5	6.271*** 1<2,3,4,5	11.485*** 1<2<3,4,5	6.561*** 1,2<5	3.960** 1,2<5	4.765*** 1,2,3<5	4.579*** 1<2,3,4,5	2.355				

\*\*:p<.01, \*:p<.05, +:p<.1

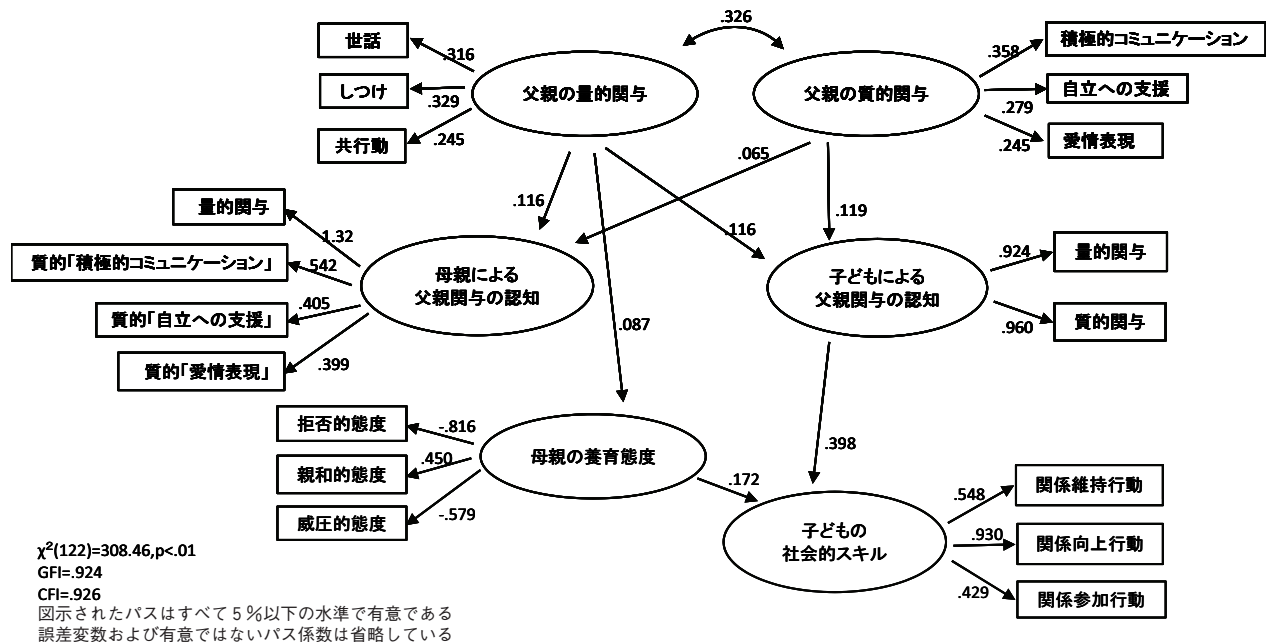


Figure 1 父親関与が子どもの社会性に及ぼす影響についての分析結果

が、質的関わりの「愛情表現」では父母とは異なる項目で高く評価していることも示された。

**父親の関わり認知と関わり時間との関連** 父親が子どもと一緒に過ごす時間（接触時間）の長さとの関わりとの関連を検討するために、平日と休日ごとに接触時間の分布に基づいて5段階に分け、量的関わりと質的関わりの下位尺度得点を比較した（Table 3）。下位尺度得点には、各因子に.35以上の因子負荷量を示した項目の平均値を算出して用いた。その結果、父親認知においては量的関わりの「共行動」と質的関わりの「愛情表現」に対して平日の接触時間の長さの主効果が有意でなかった以外は、すべての関わり因子において平日と休日の接触時間の長さの主効果が有意となった。すなわち父親においては、接触時間が長い方が子どもと多く深く関わる

ことができていると認知されているという結果であった。しかしながら子どもの認知については、量的関わりに対しては平日と休日の接触時間の長さの主効果が有意であったが、質的な関わりに対しては平日でも休日でも接触時間の長さは有意な影響を与えていなかった。つまり、父親からの関わりを受ける側である子どもにおいては、量的な関わりは一緒に過ごす時間の長さとの連動して認知されているものの、父親からの質的な関わりの深さは時間的な長さとは無関係に認知されていることが明らかとなった。この結果は、わずかな接触時間しか持たない父親であっても、長時間にわたって子どもと一緒に過ごすことができる父親と同等に子どもに対して質的な関わりを深めていくことができることを示唆するものであると言える。さらに量的関わりにおいても多重比較で有意差が

認められたのは、平日でも休日でも接触時間が最短のグループとそれ以外のグループとの間だけであり、ある程度の接触時間（平日は1時間以上、休日は4時間以上）になれば、子どもの認知では父親の関わり方には量的にも差異はないことが確認された。

**子どもの社会性に対する父親関わりの影響** 父親の量的関わりと質的関わりが子どもの社会性に及ぼす影響について検討するために、共分散構造分析を行った。ここでは父親関わりへの直接効果と間接効果を明らかにするために、父親関わりに対する母親認知と子ども認知および母親の養育態度を媒介変数として取り入れたモデルを設定し、有意でないパスを削除しながら分析を繰り返した結果、最終的に Figure 1 のようなモデルが得られた。モデルの適合度は、 $\chi^2(122) = 308.0, p < .01, GFI = .924, AGFI = .857, CFI = .926$  であり、ほぼ満足できる値となった。

子どもの社会性に対して直接的な影響を与えていたのは父親関わりに対する子どもの認知と母親の肯定的な養育態度であり、父親自身の子どもへの関わり認知は有意な影響を及ぼしていなかった。しかし父親自身の関わり認知は、子どもによる父親関わりへの認知に対して有意な影響を及ぼしていた。つまり、子どもの社会性は子どもが父親に積極的に関わってもらっていると感じている子どもにおいて高く、そのような子どもの認知は父親自身の子ども関わりによって支えられていることが示された。また母親の養育態度も、量的な関わりだけではあるが父親自身が子どもとよく関わっていると考えるほど肯定的になるという関連性が認められた。これらの結果から、父親の子どもに対する関わりは子どもの認知と母親の養育態度を媒介して、子どもの社会性の発達に間接的な影響を及ぼしていることが明らかとなった。父親の量的関わりと質的関わりとの影響力を比較すると、母親の関わり認知に対する父親の量的関わりとのパス係数は質的関わりとのそれよりも大きいことや、母親の養育態度に対する父親の質的関わり認知のパスは有意ではなかったことから、母親に対しては父親の量的な子どもへの関わりの方が質的関わりよりも大きな影響力をもつことが示唆された。一方、子どもの関わり認知に対する父親の質的関わりと量的関わりとのパス係数はほとんど同じであり、子どもに対しては父親の量的な関わりと質的関わりは同等に影響を及ぼしていると考えられた。

#### 4. 全体的考察

本研究は児童期の子どもに対する父親の関わりに焦点をあて、子どもの社会性に及ぼす影響について検討を行った。調査1では児童期の子どもに対する父親の関わり方を明らかにするために面接調査を実施した結果、父親の関わり方は9つのカテゴリーから整理された。同時に調

査した母親による子どもへの関わり方も父親と同じカテゴリーで整理できたことから、子どもに対する具体的な関わりの内容においては父親と母親に大きな相違はないと考えられた。しかし調査協力者の語りからは、父親と母親は互いの役割を分担しバランスをとりながら子どもに接している様子が窺えた。そのなかで父親には「社会との接点になる」「いるだけで安心」「最後に叱る役目」といった関わり方が母親から期待され、父親自身もそれを心がけているようであった。調査2では調査1の結果に基づいて父親の子どもへの関与を項目化し、父母子のそれぞれに評定を求めたところ、父親の自己評価において高得点であった「子どもが将来社会で一人歩きできるように育てている」「子どもが困難なことに遭遇したときには子どもを守ろうと考えている」等の項目は母親によっても高く評価されていることが示された (Table 2)。これらの項目内容は調査1で語られた“父親としての役割”と一致するものであり、“父親ならではの関わり方”の存在が質問紙調査においても確認されたと言えよう。また、父母子による父親関与の評定値を項目ごとにみると (Table 1, Table 2)、三者のなかで最も高い評価をしていたのは母親が多かった。父親の子どもへの関与について多くの母親は不満を抱いているとしばしば言われるが、実際には母親の評価は高いことが様々な実態調査において報告されており (国立社会保障・人口問題研究所, 2004; ソニー教育財団幼児開発センター, 2000等)、本調査結果でも同様の傾向が認められたと言えよう。一方、父親からの関与を受ける側である子どもの評価は父母よりも有意に低いものが多く、子どもは父母が考えているほどは父親に関わってもらっているとは感じていないことが推測できた。

本研究では、父親の子どもへの関わり方を量的な関わりと質的関わりという2つの側面から捉えることも目的であったが、調査1の結果からは量的関わりと質的関わりは関わり方の内容の違いというよりも、むしろ関わり方の意図や目的の違いであることが示唆された。つまり、具体的な関わり (例えば“会話をする”) は同じであっても、その長さや頻度に重きがおかれていれば量的な関わりと、関わりを通して子どもの生活や内面を把握することが意識されていれば質的関わりになりうると考えられた。具体的な関わりが同じであるならば両者を分別することは当然容易ではないが、本研究では面接調査から得られた語りをもとに、量的関わりと質的関わりを個別に測定する尺度の構成を試みた。調査2で収集したデータからは、父親自身の評定では子どもへの量的関わりは「世話」「しつけ」「共行動」、質的関わりは「積極的なコミュニケーション」「自立への支援」「愛情表現」とそれぞれ命名できる3因子に収束されたが、これらの因子は父親の子どもへの関わり方として概ね妥当とみなすことができよう



(Table 1, Table 2)。一方、子どもの評定では量的関与も質的関与もすべての項目が1つの因子としてまとまって抽出され、子どもは父親の関わりを量的にも質的にも「多いー少ない」「深いー浅い」の一次元で捉えていると考えられた。このような量的および質的な関わりを父親が報告した子どもとの接触時間の長さによって比較したところ (Table 3)、父親では量的にも質的にも接触時間が長いほど関与が多く深くなると認知されていたが、子どもの認知においては接触時間の長さが影響していたのは量的な関与だけであり、質的な関与については接触時間の長さの主効果は認められなかった。子ども認知における接触時間の長さの効果に関するこのような結果は、量的関与を「時間や回数でカウントできる関わり」、質的関与を「子どもの理解や精神的な触れ合いを求める関わり」と考えて作成した尺度項目の妥当性を傍証するものと言えよう。ただし父親認知では量的関与だけでなく質的関与でも接触時間の主効果は有意であったことは、質的関与も接触時間の長さに影響を受けることは当然ありうるとは言え、量的関与と質的関与の定義と測定項目の妥当性についてさらに検討を加える余地があることを示すものであろう。さらに今回作成された尺度では、具体的な関わり項目と子育て観の項目の混在が認められる。この点についても留意したうえで、量的および質的な父親関与尺度のさらなる検討が必要であろう。

次に、子どもの社会性に対する父親関与の影響について考える。先行研究にならい、本研究でも父親関与の直接効果と間接効果を念頭に置き、子どもの社会性への媒介変数として父親関わりに関する子どもの認知と母親の認知および母親の養育態度を組み込んだモデルを設定した。その結果、父親関わりについての父親自身の認知は子どもの社会性に対して直接的な影響を与えていないことが示された (Figure 1)。子どもの社会性に直接的な影響を及ぼしていたのは父親関わりに対する子どもの認知と母親の養育態度であり、それらを媒介して父親関与は子どもの社会性に対して間接的に影響を及ぼしていることが明らかとなった。父親の関わりに対する子どもの認知が彼らの社会性に直接的な影響を及ぼすことは石井 (2004) でも確認されているが、石井 (2004) では父親自身の認知の直接効果も認められていた。石井 (2004) では父親の子どもに対する関わりは子どもと話したり遊んだり宿題を手伝ったりする頻度と時間によって測定され、また子どもの社会性の測定には、5項目中3項目で親以外のおとなとの交流や親しさの程度に関する項目が用いられていた。つまり、父親関与と子どもの社会性の測定項目の内容が類似していたことにより、石井 (2004) の調査においては子どもに対する父親関与についての子どもの認知だけでなく、父親自身の認知も子どもの社会性に対して直接的な影響を示したと考えられる。

一方、本研究で用いた父親関与の測定項目は石井 (2004) よりも幅広い内容を含んでおり、また子どもの社会性も友人間での関係性を尋ねたものであった。したがって、石井 (2004) で確認されたような子どもの社会性に対する父親認知の直接効果が本研究においては認められなかったのは、当然の結果であるかもしれない。むしろ、一見子どもの友人関係に対して関連のない内容から構成された父親関与が、子どもの社会性に対して間接的にでも影響を及ぼしていることを明らかにした本研究結果は、子どもに対する父親の関わり的重要性を示すものであると言えよう。

子どもの社会性に直接的な影響を及ぼしていた母親の養育態度に対しては、父親関与のなかでも量的関与の多さが、母親による父親関与の認知を介することなく直接的に影響していることが示された。これまでも、父親の育児や家事への関わりが夫婦関係や母親の精神的ストレスを媒介して母親の養育態度に影響することは多くの研究によって示されている (尾形・宮下, 2003等)。本研究での量的関与の項目はそれらの先行研究において用いられていた測定項目に比較的近いものであった。つまり、「世話」「しつけ」「共行動」の側面から測定された本研究における父親の量的関与は、母親にとって育児を含めた家事軽減につながるものとなり、その結果、父親関与についての母親認知とは無関係に肯定的な養育態度を促進したと考えられよう。さらに父親関与に対する母親認知に対しても、父親の量的関与の方が質的関与よりも影響力が大きいことが示されており、これらの結果は母親にとっては子どもに対する父親の量的関与が大きな意味を持つことを示唆していると考えられる。一方、因子分析の結果では量的関与項目は1因子構造となったのに対して質的関与項目に対しては3因子が抽出され、母親は父親の質的関与を多面的に認知していることが示された。調査1においても母親が期待する父親関与は「父親ならではの存在感や役割」という質的な関わりであることが示されていたことを考えると、母親は父親の子どもに対する質的な関わりを重視し注目していることも明らかであろう。つまり母親は父親に対して子どもへの質的な関与を期待しながら、母親自身は父親の量的な関与によって助けられていると解釈できよう。

このように母親にとっては父親の量的な関与が重要であることが示されたものの、本研究では子どもに対しては父親の質的な関与も大きな意味を持つことが示唆された。先にも述べたように、接触時間の長さの効果は子どもの質的関与の認知に対しては有意ではなく、父親に質的に関わってもらっているという子ども自身の認知は実際の関わり長さとは無関係であった。したがって、子どもの社会性に直接的な影響を及ぼしていた父親関与の子ども認知が父親の質的関与と量的関与から同等の影響

を受けていたことを考え合わせると、たとえ短い接触時間であっても子どもと積極的にコミュニケーションをとり、愛情表現や子どもの自立に向けた支援を行うことで、父親は子どもの社会性の発達を促進しうることが明らかにされたと言える。本研究の調査協力者であった父親の平日における子どもとの平均接触時間は2.18時間であったが、この値はアジア欧米との国際比較の調査結果（国立女性教育会館，2006）とほぼ同じ（2.67時間）であった。その調査ではわが国の父親の子どもとの接触時間は韓国を除く諸外国よりも1時間以上も短く、その時間の短さに対して約4割の父親が悩みを感じていたことも報告されている（国立女性教育会館，2006）。つまり父親の子どもとの接触時間を増やす努力は今後も社会全体で行わなければならない重要な課題ではあるが、当面の日常生活において父親が子どもに対してどのように関わっていくべきであるのかを考えることも現実的な問題であろう。そのような問題に対して本研究における結果は、質的な関与の影響力を実証した点で貢献しうるのであると考える。子ども、特に児童期の子どもに対する父親関与の影響は未だ十分な研究が行われているとは言えず、今後もさらにデータを蓄積したうえでそれらの結果を比較しながら、どのような父親の関与が子どもの何に影響し発達を促進するのかについて、よりいっそうの検討を行うことが必要であろう。

### 引用文献

- 蘭千尋 1992 友人関係や仲間集団の働き 木下芳子（編）新・児童心理学講座第8巻 対人関係と社会性の発達 金子書房 pp.266-268.
- 独立行政法人国立女性教育会館 2006 平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書 <http://www.nwec.jp/jp/publish/report/page16.html>
- Hawkins, A.J., Bradford, K.P., Palkovitz, R., Christiansen, S.L., Day, R.D & Call, V.R.A 2002 The inventory of father involvement: A pilot study of a new measure of father involvement. *The Journal of Men's Studies*, 10, 183-196.
- 平井滋野・岡本祐子 2003 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連 青年心理学研究, 15, 33-49.
- 石井クンツ昌子 2004 父親の子育て参加と就学児の社会性に関する日米比較調査 家族社会学研究, 16, 83-93.
- 柏木恵子・若松泰子 1994 「親になる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 加藤邦子 1992 父親の性別意識と父子かかわりの関連について 家庭教育研究所紀要, 14, 117-123.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から 発達心理学研究, 13, 30-41.
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40.
- 木田淳子 1981 父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究—共働き家族を対象に— 滋賀大学教育学部紀要人文・社会・教育科学, 31, 79-97.
- 木田淳子・大谷直美 1992a 父親の子育て参与に関する家族関係的考察（第1報）—職業要因および家族静態-相互作用的要因が及ぼす影響— 日本家政学会誌, 43, 721-733.
- 木田淳子・大谷直美 1992b 父親の子育て参与に関する家族関係的考察（第2報）—父子の心理的紐帯に及ぼす影響— 日本家政学会誌, 43, 1185-1194.
- 児玉典子・水原敏子 1992 幼児期と児童期の子どもに対する父親と母親の養育行動 滋賀大学教育学部紀要人文・社会・教育科学, 42, 47-62.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2004 第3回全国家庭動向調査 [http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ3/NSFJ3\\_top.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ3/NSFJ3_top.asp)
- Lamb, M.E. 1976 *The role of the father in child development*. New York: Wiley. (ラム, M.E. (編著) 久米稔・服部広子・小関賢・三島正英 (訳) 1981 父親の役割 乳幼児とのかかわり 家政教育社)
- 前田由美子・内藤和美 2003 男性の子育てとその社会的保障に関する研究—第1報：1999年以降の父親研究の動向 群馬バース学園短期大学紀要, 5, 175-183.
- 森下葉子 2007 幼児期の子どもをもつ父親の育児関与に関する研究の現状と課題 学校教育学研究論集, 15, 15-28.
- 文部科学省 2009 平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果（暴力行為、いじめ等）について [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/21/11/1287227.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/11/1287227.htm)
- 中野由美子 1992 3歳児の発達と父子関係 家庭教育研究所紀要, 14, 124-129.
- Nash, J. 1965 The father in contemporary culture and current psychological literature. *Child Development*, 36, 261-297.
- 尾形和男 2001 「父親の子育てへの関わり」についての夫婦間の認知のずれと夫婦関係、家族機能及び父親の変化との関連 群馬社会福祉短期大学研究紀要, 5, 63-87.
- 尾形和男・宮下一博 1999 父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達および父親の成長 家族心理学研究, 13, 87-102.

- 尾形和男・宮下一博 2000 父親と家族－夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス，幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達－ 千葉大学教育学部研究紀要, 48, 1-14.
- 尾形和男・宮下一博 2003 母親の養育行動に及ぼす要因の検討－父親の協力的関わりに基づく夫婦関係，母親のストレスを中心にして－ 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 5-15.
- Palkovitz,R. 2002 Involved fathering and men's adult development: Provisional balance. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associations.
- 佐々木保行 1996 父親の発達研究と家族システム－生涯発達心理学的アプローチ－ 教育心理学年報, 35, 137-146.
- 佐々木保行・大日向雅美・平塚裕子・窪田信子・森和子・山口垂希子 2000 日本における最近10年間の父親研究の動向 鳴門教育大学研究紀要, 15, 55-64.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響－積極的拒否型の養育態度の観点から－ 教育心理学研究, 45, 173-182.
- 財団法人ソニー教育財団幼児開発センター 2000 現代の父親と子育て－父親の育児意識と母親のパートナーシップについて－ <http://www.sony-ef.or.jp/eda/study/committee/hakusho04.pdf>

#### 付記

本研究は第2著者が兵庫教育大学大学院学校教育研究科に提出した修士論文（平成18年度）におけるデータを再分析したものである。